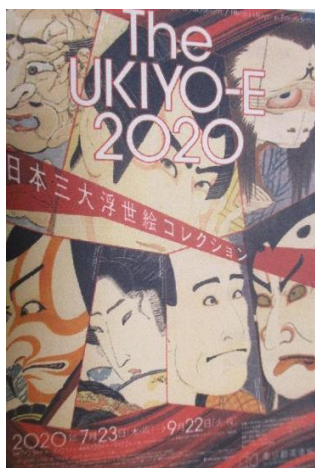


The UKIYO-E 2020 —日本三大浮世絵コレクション

東京都美術館 2020. 07. 23～08. 23(前期) 08. 25～09. 22(後期)



「浮世絵」は、江戸時代の庶民たちに愛好された日本を代表する芸術のジャンルで、その人気は欧州の印象派の画家やフランスの音楽家「ドヴィシー」や「ラヴェル」たちに大きな影響を与え、“ジャポニズム旋風”を起こしたことで知られている。

本展覧会は、質、量ともに「日本の三大浮世絵コレクション」とされている「太田記念美術館」「日本浮世絵博物館」「平木浮世絵財団」の名作品を結集し、浮世絵の初期から幕末の優れた「約450点」の浮世絵版画の展示である。

展示されている作品は、「歌麿」「写楽」「国芳」などの浮世絵の超スターらの名作品で、圧倒されることは間違いなしとの評判である。

歌川国芳 つうぞくすいこでんごうけつひやくはちにんのひとり 《通俗水滸伝豪傑百八人之老人

ちょうりはくちようじゆん

浪裡白跳順》大判 1828(文政末)年頃



国芳画伯の「通俗水滸伝シリーズ」は、とても躍動感溢れる勇壮な英雄たちの姿の描写が大きな評判となり、一躍脚光を浴びてそのまま彫物の絵柄として、贈り物の流行にも拍車をかけて、浮世絵としての地位を確立したとされている。

本作品は、昔から「水門破り図」の名で呼ばれ愛されている逸品で、豪傑の荒々しい描写に、画像構成、登場人物の性格描写、配色すべてに非の打ちどころがないもので、画伯の出世作品とされている。

喜多川歌麿 《高名三美人》1792～93(寛政4～5)年



寛政期の江戸時代で評判であった当時の「三美人を描いた作品」で、右側の黒の着物で団扇を持つ女性が朝倉の水茶屋・難波屋娘「おきた」、左の手ぬぐいを肩にかけた女性が両口の薬研堀の煎餅屋の娘「おひさ」、そして二人の後方が新吉原廓の芸者で富本節の名手とされた「宮本豊雛」である。当時は、江戸の三美人と評判の高かった女性たちの美しさを競うように、それぞれの身分の違いを明確にして「一枚絵とした作品」である。